

おうが

これもと

大神氏の始祖惟基を

”あかがりの大弥太”ということについて(三)

大分大学名誉教授
九州東海大学教授

富 来

隆
(大分市・志手)

〔補記〕 羽柴さんへの追悼への意をこめて記した

本論は、先稿ではほぼ終っている。しかし、最後の祖母山の神については述べなかつた。というよりも、述べ得なかつたというのが正しい。それが心にひっかかっていたが、やっと近日になって一応の説明がつくようになった、そういう気がするので、ここに補記させていただき、大方の御批正を得たいとおも

う。

◇ ◇ ◇ ◇

一、祖母山の「ソボ」が、じつはソウルの音を写したものでないか、とは早くから言われていた。北村清士氏は『直入全史』のなかで、祖母山の西南麓に添利・山神社のあること(ソウリとは、ソウルのこと)を紹介されている。しかし、その後これ以上に論は発展していない

ようである。

それでは、その祭神の「健男霜凝日子」(タケヲ・シモ・コリ・ヒコ)の名についてはどうであろうか。これについても「霜」が農耕と関係があるというような俗説の域を出ないほかは、一向に論はずすんでいないように思われる。

また大神ノ惟基にかかる「大蛇神婚」譚にしても(平家物語、源平盛衰記)、これを古事記にみえる三輪山の物語りと比べるだけで、あるいはこれのマネと考えるだけで、あまり進展はみられない。私の先稿も、「あかがり」の「カリ」を朝鮮語の *칼리* *Kalli* 銅の義と推論したが、それだけに終ってしまい、祖母山の神とむすびつけるまでに至らなかつた。

二、ところが、このカリ（コリ）＝Kuri、すなわち銅という私の推論（これを『卑弥呼』学生社刊、に詳述した）から発展させて、日本古代史につきつきと問題を提起されている畑井氏が、近著『天皇と鍛冶王の伝承』を送って下さったのを機に、前者『物部氏の伝承』も一緒に読みかえして、面白い発見をしていることに気付いた。それはこうだ。

かの天孫降臨紀に出てくる猿田彦神（さるとひこ）について『日本書

紀』は、

眼（メ）八咫鏡（ヤタノカミ）の如くにして、純然（テリカキヤ）けること、赤酸醬（アカカヂ）に

似たり。（第一の一書）

と描写しており、そしてふつうには酸醬（カガチ）とは「ホウヅキ」のこととされている。畑井氏はこれに疑をもった。

八咫ノ鏡のごとき眼が、赤い「ホウヅキ」のように、照り輝いていた、というのはどうも（真意ではなさそうだ）というのである。そこで朝鮮語の辞書をしらべてみた。

卍리 Kwari:ri ほうづき

ホウヅキのことを朝鮮語で「クワリ」（カリ）という。

猿田彦の眼が、八咫ノ鏡のごとく、赤カリのようにてり輝いていた、と記されていたので、カリ↓酸醬↓（カガチ）となったのであろう。もともと赤カリ＝赤銅と記されていればこそ、本意どおりに筋がとおる、ところなのに、カリ↓クワリ（酸醬）と記された。普通の便が、宛て字が変ったために、その意味もかわってしまった、と考えたい。

右の畑井氏の論は、さきの私の推論とまったく軌を一にする。「アカガリ」に「赤雁」のような字をあてているときは良いのだが、平家物語は「雁」（あかがり）の字をあて、それがさらに源平盛衰記では「鴈」（あかぎれ）の字をあてることになって、「夏も冬も、手足に大きなアカギレがわれていた」などの説明まで付くようになってしまった。これについて、先稿に「あかがり」＝赤銅だ、ということを書いたのであるが、右の猿田彦の一文は、大神ノ惟基の記事とまことによく似かよっていることに気がつく。

「眼は銅の鈴を張るがごとく」そして「あかがりの大弥太」と称する、というのだから、この惟基の記事は、まことに古めかしい表現が、すなおに残されていたもの

である、と言える。

三、畑井氏の朝鮮語をもってする解釈に、私もさらに勇気づけられた。そこで、祖母山の「ソボ」が、もし「ソウル」の転訛であるとするなら（添利、ソウリ、とあるからには、可能性は大きい）、その祭られた神の名もまた、そういう形で解されはしないだろうか、と思いをめぐらしてみた。

「健男霜凝日子」そのなかの「霜凝」シモ・コリのコリは赤ガリのカリと同じく朝鮮語の Keri (銅) ではないだろうか。だからまた、大蛇神に「赤ガリ」の眼というような表現がとられたのではないだろうか。ここまでは、うまく説明がつきそう。

だがここでストップしてしまう。「霜」シモについて、どうしてもうまい成案を得ることができない。苦しみつつ、そのまま時日が過ぎていった。

つい先日から、ふたたび三度び、朝鮮語の辞典をひらいて、頁をめくりつつつけた。

霜 (しも) 서리 seri (サリ)

これではどうしようもない。「しも」ではなく「そう」

の音通で *seri* となるのだとは分った。これでは「しも」にならない。だが、よく似たのに *sari* (糸の) ^{たは}束、というのが眼についた。 *se* と *sa* のちがいにすぎないが、日本語では霜と (糸の) 束とのちがいになる。それにしても、糸の束とは面白い。そこで視点をかえて、シモに似た発音の単語を片っ端からおさえてみることにした。そして *korri* も同様に。

そこで面白いことが分った。

서리 머리 si:ri 糸の先

고리 kori 環 (わ、たまき)

これを日本語にすると、シルマ (リ) であり、シルマ・コリ ↓ シマ・コリと転訛するのはかんたんである。シマ・コリ、またシモ・コリというのは、日本語なら (糸の先) ・ (環) ということになる。平家や盛衰記の文によれば、

「男のくびがみに針をさし」小田巻 (緒環おだまき) の端に貫いて」「糸のしるしを尋ね行く」

という。これからすれば「糸の先」「環」をつけたという意味が、朝鮮語でシモ・コリということになる。この発音を日本語であて字をして、霜・凝の日子という名に

なったのではないか。

これは筋が通って、スムーズに説明づけられる。

健男（タケヲ）の「タケ」が、蛇神を示していることはすでによく知られているとおりである。

竹については、鞍馬の「竹伐り」の神事が、じつは、「蛇切り」をあらわすとされている。そして竹（タケ）と同じく、健・建・武などの「タケ」も、同じ義であるときれ、嶽（タケ）もまた蛇神を示すのだ、と言われている。

したがって、この「健男」（タケヲ）というのは、蛇神を示すこと、当地の「富尾」（トビヲ、トビノヲ）と同じ意味だとしてよいであろう。

こうして、祖母山（ソウル岳）の神なる「健男・霜・疑・日子」という名は、そのまま『平家物語』『源平盛衰記』に記された蛇神婚譚の内容を示す名前なのだ、ということがはっきりとする。

四、もしこの解が正しく成り立つとすれば、この物語りは、古い分と古い伝承だ、ということになるだろう。三輪山の伝承（古事記）のまねをしたものではなく、む

しろこちらの方が本家だと主張したくなるほどの、古代海人族のもつ古い伝承なのではないか。

祖母（ソボ、ソウル）山の神「タケヲ・シモ・コリ・ヒコ」は大蛇神であり、里の姫のところに通って首すぢに「糸の先」「環」をつけられた「男」であった。この神婚譚は古いものであったにちがいない。

それが再生して、佐伯ノ是基をモデルとし、大神ノ惟基という英雄の姿を仮りて現われたものであるうか。

ここに、豊後水道域に巨歩をふるした海部族たちの真の姿がある。その海部族（海人族）たちは、先稿にも記しかけたように、他方には採鉱・冶金の業にも従事する工人でもあった。その永い伝統が、歴史の上にも反映して、佐伯ノ是基、大神ノ惟基、そして緒方ノ維義ら大神氏一族、という活躍を奥南の地にのこしているのではなからうか。

— 以上 —

